



和歌

古語深秘抄

後鳥羽院御書
宣家私手式

四

NO 940
10.



和歌古語深秘抄 四

都留文科大学附属図書館所蔵

大正加文店

源三郎

後鳥羽院御口傳

大和行を録する書とい昔より今亦るまで
人のいさめりもあつたはるなりたつた
むももろく唯天性をゆつたはるなりたつた
風情の妙成をゆつたはるなりたつた
こはよあつた進退とゆつたはるなりたつた
姿まらつくも一隅をゆつたはるなりたつた
うけりくけりたるもあつたはるなりたつた
艶あるあり或は風情をむのりたるなりたつた
を姿成たるもあつたはるなりたつた

才則詞はむい^才要とされい又古ありけれは
今初これ人のさうに略してその至要なり
俗に七ヶ條あり但人よりうらうらと斟酌を
さうり也

一私行学問して種々此輩儀とをてし
才学をより事いんよりさうらふれは
よなき、万葉集よりうらふやうにんて
さうらふはあつたはし用ありて
きひの人の萬葉集れ詞とてりて詠
さふすはえらまぬなりうらひ無下の事

みくろくたふ文字れうらうらとを
つむく先一五人今も同てさうらふなり古
今集りも志していあつたはし
行ともる又さゆく乃奇とも行ての
さうらひ必存知をさうらひ

一道をこのむにせりぬれいあつたはし
あつたはし指燭一さうらひに
詠一お中さうらひ練習入るさうらひ
さうらひもさうらひ百首は詠早ぬれ
又さうらひ先く或は無題或を詠題と

冷めりしときを其溜あらし
寐連へしに結題をくまひり
定家も題のゆゑにさぬそのれき
こまにゆりし道代初心のまれ
あし一宿あふまゆり結題をい
思入る題れ中と涙をいしと
ゆりし^あ結題を代乃様い合
うからす時くよみあふへ
清門抄改の結題しに
しとくしとすわい池水半水と

題りて

池水半水にあしれ少なりけく

こほりかよのあほりさるし

ゆらゆれさるしもすういさるけ

まもも題の心をみりくおしりく

真もある半くくゆりし

一 行合乃字をたつて世よまよふゆれを

とくし釋阿寐連おをいしきり^一初^一の極

くくし^一題のゆゑにくおしりく病

なく又深成まれ物語乃行れんを及こ

らん河内とらふをねーかひしきし
まゝく相終乃乎れらるる百首の予
一とてそめくも事とも近代共成
なり

一 南原れ余よい先さ後てお名れも題毎
く海一とれくもよ事とれまや
出らるる葉まれのふのさいそよれそ出
れは一とれらるる海一とれ心と葉とれ
とれとれふつとれ心とれとれとれとれ
とれとれとれとれとれとれとれとれとれ

是頃省略を凡行のまゝの面れとれ
第一極おれとれとれとれとれとれ
ありす但ぬふ世れよの中にもあはれ
一或い手とれとれとれとれとれとれ
信とれとれとれとれとれとれとれとれ
いとれとれとれとれとれとれとれとれ
すく二振りらるるうとれとれとれとれ
様とれとれとれとれとれとれとれとれ
えとれとれとれとれとれとれとれとれ
則定家心の庶幾とれとれとれとれ

うかすけらんぬをの山ぢり
ちきりいれといの思りの
士をり又

うけなくまね入はれを飯
たさねなりうけ林去りよれ

うけりよ姿也故土河内府亭
釈供乃ありに釋河内府亭
やすくい出言かこと申道
事少くりけりいれ信
きけりよ家中れものよれ

てさい風情をのり
入くうくまき
井よみり後れ
ちりまき
まき
寺跡小愚
おし
おあり
相無く
より

子子子子子子不可説れよ身なり清濁
をさささささささささささささささ
交平交平交平

いふにちり思水乃之れいん
いふにちり思水乃之れいん

五尺れあや先草よ水乃之れいん
きよ心つーとよきり

よくも麻乃うよくおゆいり
よくも麻乃うよくおゆいり

釋河優也多子にゆきやよき色き
とりくく大炊沙門前赤院故中沙門坊
改吉水大僧正のわ殊勝く赤院をとも
きみくとある極りよゆれき故坊改い
おひひひひひひひひひひひひひひ
みゆり事現のなふ子こまよりあさ
まの寺思儀もちり百首をのりさし地
たりくくくくくくくくくくくくく
けんくくくくくくくくくくくくく
なやいんたのせかこく大僧正サヤ

七〇三

ありのふゆをとりまればと

友也次將として廿年よとてひまは徳のふ
しやこゝもかんきしししししし希代の
勝半ふくありふを自讃を今身すや
みんをえまはも必ず乃善悪ふらふこと
かゝもや所ししししししししししし
平をぬ必自讃すし定家々あの方よ
ふしし一日大月より取のまこれふよ存の
花はさり入く中河門抄取のまふししし
きりしふふししししししししししし

逃すきねしあかちに行れしし
てぬあふししししししししししし
りの撰集れししししししししししし
自願ししししししししししししし
能かまいししししししししししし
異換乃しししししししししししし
勅撰を給ししししししししししし
くわれぬ実ししししししししししし
也れ橋の縁ししししししししししし
定乃原しししししししししししし

儀たりとくくんとて、これらありて
まゝ公事とて、月々撰集し、
後代にても、海にや、
あれども、
ら〜次

仁治元年十二月八日、於大原山西
林院普賢堂、以教会上人、可持御宸
筆奉書写之、其書草本之外、他可持御筆、
頗有由来、尤可為珍
寶之

件乃教会上人、彼院に遠可ま〜付ま〜せ〜
ハ、ま〜の市時、戸〜い〜人〜も〜也、
也、
見書之

貞和六年二月朔日、栗田口寄宿坊
出写之、先年、以茶花園上人奉出留

大納言御信

夕なれい門田乃編美ふそくつまうく
わいのまらわやーあさこの女さあ
高の代いほさうーとそらうよ祢風や
尺もすそ川のともまんりさりい
沖津の女あさよさうーあすの地
ねのーつえをあへぬーは

後頼朝后

心さうーされそあーいりひささうら
平井よ尺ゆふ鏡乃ー系

おら踏津八十うら川乃とやさ瀬し
岩にすうなまのい毎のうすうと

これいささのさ秀平の申神と
尸さきしや

らうらうゆれ入江乃と海風り
尾花乃とよふあれのゆしとれ
あかさいちかふもみら葉ようつれを
あつーあふーあれとさう
されい幽玄しゆもけすうにいひ
ーかいあがり

法橋御書

冬風のそらよりさらさら葉は舞りて人より
 母らにふか月ののりのこやけに
 君らよりいせしりや梅らんごのしれ
 とももそよよにこやくに君れよ
 難波人よこよこつこのまのこ
 久のこまあそおきなりたり
 かりんこふよのはやーれいせん
 うしこもーせさーらにまのーい

巻後

あつゝ風のつよの浪をたかりききて
 やいひりーらふらつが月くれ
 らまのこまあそおきなりたり
 あつれーの秋よやぬあつと

先人

まもやらんのかのいんばらさうーのり
 花乃若らぬらうが乃あを海乃
 世の中よんしそあけまたりひ入
 心乃ゆくあを麻うけくがら
 すこわひてあそくくひはあまらー

最元之此自征夷將軍依先人所注
送之秘本也

弘長二年九月老後吏書寫之

三代撰者桑門融覺

判在

以祖父入道大納言自筆本令書寫沈
最可為證本矣

奉議藤原為秀

判在

